勢山文書 ⑦「おさしづ」の写し翻刻

天理教一広分教会長
安井　幹夫　*Mikio Yasui*

（５）―（イ）明治廿八年十一月五日　三日前ヨリ御席様身上障ニ付御願
さあ〳〵尋る処〳〵　さあまた尋ねにやならん　身上にち〳〵にわからず〳〵　事情はこぶ　事情といふハとんとわかりがたない　日々まつてる里ハながい　云てるまに日がたつ　事情はじめかけたら　どういふ里はじめるとわからん　日々にどれだけにむかうもわからん　日々おくれるとさぶしいなるともわからん」（３ウ）
ふかき里さだめて聞訳にやわからん　なんにんよせた処がわかりがたない　やすます〳〵ハあらいかゑとさしづしておこふけふの処はなしかけたら　とき〳〵もつて尋ねにやなろふまい尋ねバおさまる道をさとす　それに以てまた〳〵尋る　一寸にわからん　これよくさとしておくよつてきゝわけてくれ

（ウ）明治廿八年十一月十一日　御本席様四五日前より御障ニ付今日御本席様へ人かし願」（４オ）
さあ〳〵一寸尋ねかける処　尋ねかけるハ一ツの事情　いかなる事万萬（萬事の書き違いか？）さしづもつてさしづにおよぶなんでもかでも里をだいとしてたてゆくから　里にむかわんよふ　さからわんよふ　これだけおさめかけたら　どんな事でもおさまる　世上の里が有レバどうやろふと思ふ　おもふハめん〳〵心に里があるからあんじる　どんと心おさめてくれ　道の里ふりかぶりなきよふ　世上に里おろしたる里をきゝわけ　おさまるおさまらんといふからよふ聞訳　もんじもわからぬものでも道につかふ　里聞訳　処にハ名所おろしたる　そも〳〵からおさまらん一ツの」（４ウ）
しんがもとである　しんがくるふから　まちがふからおさまらん　二度三度はこぶ　りを聞訳　もとゝいふ　じばといふハ世界も一ツとないもの　おもへバおもふほどふかき里　ふるいものうづもれてあるといふハよふ聞訳　人間の心でハわからんわかりかけたらわかる　ふるいものハ処に　また処々でるにでれんといふ　よふ聞訳　里のとりよふでかるくなる　でゝくる里ハ神の里であると聞訳　たれかれハ一寸にゆわん　ほんにこれハなるほどゝかんがゑだして　これと〳〵あざやかさら゛ゑてくれ　たれにこふして　かれにこふせゑとゆわん　りからかゝりて」（５オ）
くれ〳〵　いつからかゝるともゆわん　かゝれバ皆そだつ〳〵心をもつておさめてくれ　あちらに一寸かゝゑが有て　これがどうも一ツとんとあざやかならん　是聞訳てなにもあぶなぎこわきハなきとさとしおこふ

（エ）明治廿八年十一月十三日　本部長様の普請本部員会義上御願
さあ〳〵尋る処〳〵　まあ〳〵ぜん〳〵から尋ねかける処　皆かりやとさしづしてある　かりやと〳〵いふハほんのかりやまでのものハかりやといふ　ねん十分すれバなんどきなりと　とるといふわけにハいかん」（５ウ）
かりやとしてどこへなりと　けふしてあすなをすといふ心ですれバ　十分自由用といふ　又つらきや〳〵といふよふでハ　あと〳〵おくれる　そこでこゝらよかろふ　どこがよかろ　そらとりもちはこんでくれ　また〳〵つゝき〳〵　つゝきやといへバあと〳〵ひまいる　ふつごふやなあ　いつそふよそかと十分すれバだん〳〵おくれる　十祭〳〵日きりていふのハ　これもよぎなくといふ　ふしんハとりかゝりたらきりなしといふ　これだけといふて　きつてしもふたらしまい　十祭これだけせにやならんと云から　あと〳〵おくれる　まだ〳〵さき〳〵といふ心を」（６オ）
はこべバたのしみやろふ　いけ〳〵さき〳〵ながきハたのしみこれからかゝるならどんな事もゆるす　皆子供いふ事する事ハおやハきく　心にくもりなく　上ハ上下ハあわれみ　どんな事もいかんとゆわん　よふ聞訳　皆こふしてとゆへバいかんとゆわん　むりなかいぎせいとハゆわん　たがい〳〵心のりがあわんから一時かぎりの処　二時かぎりもよがあける　あくる日とゆわんならん　それでハ一ツかゞみやしきとハゆわん　こらこふしよやないかとゆゑバ　よかろふといふ里にうけとる　よふ聞訳した里ハうけとる　此やしき皆いつ〳〵まで心といふ里を」（６ウ）
もつては゛ゑつている　どんな事もたがい〳〵はこんでたべ　うるをうならいつ〳〵までといふ　かたよるとねがさらん　ねがさらんと目がささんとさとしおこふ
十年祭ニ付かぐらそんじてある御願
さあ〳〵　まあ〳〵一ツ〳〵　よふ〳〵のかぎり〳〵　こふとゆへバ心だけハうけとる
同なりものいろ〳〵御願
さあ〳〵それハミな心にまかせおこふ〳〵　こふせにやならんどうせにやならんとハゆわん　どうせにやならん」（７オ）
と重々時をもつてはこぶ処うけとる　たいそふいらん　小供づゝないめハすつきりかけん　づゝなみ見ていられん　皆心にうれしいすれバうれしいうけとる　うけとる里ハせかいなるほどゝといふ　これだけさとしおこふ

（オ）明治廿八年十一月十四日　教祖様の御ふん御伺
さあ〳〵尋る処〳〵　さあ〳〵事情さとそふ　それ〳〵よふ聞訳　もふこれ十年祭〳〵〳〵におよぶも一ツ里　おもわにやなろふまい　よふ聞訳　元といふ」（７ウ）
どういふもの　元のふしんでけん　どういふもの　これがせかいの大道やで　さき〳〵そだて　せゑじんしたらどんな処からどういふ事てけるやらしれん　なんにもわからん　もふ十分子供せゑじんしたなら思ふよふなる　せゑじん中ばにしやんといふ里　でけかけたらどうもならん処に　なるほどの里おさまりたら一時になるならんともゆわん　おやといふこどもといふ子供十分さとしておやがたのしむ　子がせゑじんしておやがたいせつ　このたのしみ〳〵といふ　世上おさまりの里十分の事が一どきにおさまる　かりや〳〵」（８オ）
日々の里にいる　どうしてこふしてふそくともゆわん　おもわせんでせかい子どもせゑじんをまちかねる　あんじもなき　いつのまになつたと云よふになる　うち〳〵の処どうでもこうでも地所あつめかけたる処　たいて〳〵よふすこしの処　じきにあつめ　さしてしもふ〳〵　又一ツ皆ぞんめい中のたちや　風其まゝ　便所ももりをつけている処　ぞんめいもおなじ事やでまゝ内々はたらきいるものだけ　かりや〳〵たてかけるがよいゆるしおくで〳〵
おしてねがひ」（８ウ）
またふつごふやで〳〵　よふ聞訳　どういふもの　十祭かぎりやといふ心どうもならんで
教長様のふしん願
かりや〳〵　かりやにかゝりて　かりやの心をもつてするがよい〳〵　かりや〳〵　その日〳〵にいるものや　よふ聞訳てくれ〳〵
（注）明治 28 年 11 月 14 日　教祖の御普請御許し願

訂正　前号左側真ん中よりやや下、「（リ）明治二十一年十一月廿日夜九時」とある表題のうち、（リ）は（ツ）の誤りでした。